

ピオーネスクール・ トマトスクール

ピオーネと夏秋トマトの栽培を新しく始めようとしている人を対象に、ピオーネスクールとトマトスクールを実施しています。

スクールでは、栽培から出荷までの過程を現地で実際に体験して、就農に向けて栽培技術を習得します。

ピオーネスクールは、旧高梁市が平成10年度から始め、今年度までに157人が受講。またトマトスクールは平成18年度からで、25人が受講しています。

■問い合わせ 農林課農政係(TEL)②10223



今年度のニューピオーネスクールの様子

農業相談センター

市は、平成18年5月に農業相談センターを設置し、すでに農業を行っている人やこれから農業を始めようとする人の相談を受け付けています。

■問い合わせ 農業相談センター(農林課内TEL)②10223

田舎暮らし 体験・交流事業

農家の後継者不足や高齢化による集落機能の低下に対応するため、地元の農業関係者等で組織する「平川村定住推進協議会」(備中町)が主催して、平成20年度まちづくり事業として行っています。農業や農村生活に興味を持っている人が、ピオーネやトマトの収穫



大阪府在住で広告ディレクターをしている関屋清司さん(49)は、インターネットでピオーネスクールを知り、妻の由美子さんとともに平成19年度のスクールに参加。また2~3年後の就農を目指して各地の農業講習等へも出向き、今回の田舎暮らし体験・交流事業にも参加しています。

作業や秋祭りなどの地域行事に参加するなどし、住民と交流しながら農村生活を体験することで、新規就農者の確保と地域活性化を図ろうとするものです。

■問い合わせ 平川村定住推進協議会事務局(備中地域局産業建設課内TEL)④4514

空き家・空き農地情報 バンク制度

市は、農地の荒廃防止、定住促進による地域活性化を図るため、市内にある空き家・空き農地の情報収集と情報提供を行っています。

これまでに14の物件登録があつて、そのうち6件が交渉成立しています。

■問い合わせ 企画課定住促進係(TEL)②10282



インタビューに答える5年生児童

農業の大切さを知って

津川小学校

市内の小学校では、総合学習に農業教育を取り入れる学校が増えてきました。

津川小学校では、地元老人クラブ・福寿会の協力により5年生が、もち米作りの農業体験学習を1年かけて行っています。

初めて田植えを経験した原田麻衣さんは「ドロドロの田んぼから足が抜けず転んでしまいました。自分たちで作ったお米でお餅をついて早く食べてみたいですね」。担任の岡島千加子教諭は「児童の半数は田植えの経験がありませんでした。お年寄りと交流しながらの米作りは、子どもたちにもよい体験だと思っています」と話します。

子どもたちは、「栄養・成分」「歴史」「米の種類」等のテーマ別にそれぞれ調査して、互いに発表する予定です。

ニューピオーネ市内販売金額等（JAびほく関係分）

年	販売農家 （戸数）	出荷量 （t）	販売金額 （万円）
平成9年	256	676	50,485
平成12年	306	811	67,464
平成15年	357	846	61,662
平成18年	389	958	70,041
平成19年	404	969	81,210

市内の販売農家戸数は、JAびほく関係分で平成9年には256戸でしたが、平成19年には404戸に増加。販売金額も、平成19年には8億円を超え

た。昭和48年に成羽町で試験的に栽培され、昭和50年代後半から県の補助事業等の効果もあって栽培が本格化し、それまで盛んだった葉たばこに代わる作物として、特産地に成長していきま

まれています。昭和48年に成羽町で試験的に栽培され、昭和50年代後半から県の補助事業等の効果もあって栽培が本格化し、それまで盛んだった葉たばこに代わる作物として、特産地に成長していきま

市は地勢条件が不利な中山間地域ですが、準高冷地域特有の「気温の日較差が大きい」「夏季冷涼」といった条件が、ピオーネや夏秋トマトの栽培に適しています。現在では、市内の約600の農家がこの2つのどちらかの作物栽培に取り組んでおり、どちらも県下最大の産地となっています。

県下一の産地を守ろう

地域に適した 農作物の栽培

ピオーネ

ピオーネは、イタリア語で「開拓者」

という意味です。

ピオーネは、おいしく、大粒で種がなく食べやすいという優れた特性を持ち、子どもからお年寄りまで幅広く好まれています。

昭和48年に成羽町で試験的に栽培され、昭和50年代後半から県の補助事業等の効果もあって栽培が本格化し、それまで盛んだった葉たばこに代わる作物として、特産地に成長していきま



ました。

販路は京阪神中心でしたが、平成15年産からは東京への出荷も開始され、高い評価を得ています。

しかしながら、近年は生産者の高齢化から、産地面積を維持することが困難となってきました。

こうした状況も踏まえ、市は、県やJAびほくと連携し、新規に栽培に取り組む人を対象にしたピオーネスクールの開催、省力化・品質向上設備の導入時の助成など、さまざまな対策を講じて、産地の維持・品質の向上に努めています。



代表の牧野さん

ピオーネの 加温ハウス栽培

宇治町では、平成15年から、加温ハウスによるピオーネ栽培の取り組みも行われてい

ます。農地の荒廃防止、地域の活気づけ、また若者が農業に取り組みきつかけとなれば、などの思いから導入しました。

現在、14軒の加温ハウスを、宇治ピオーネハウス部会の6戸が管理しています。

2年前から、収穫期には観光ぶどう園と直売所も開設。園内の一部にはスロープが設置され、子どもや車いすでも収穫が楽しめるよう工夫されています。

同部会代表の牧野義廣さん（53）は「導入から5年が経ち、ようやく全体の様子がつかめるようになったところ。ただ原油高騰で今は厳しい状況です。産地として売れるよい商品を作っていくには、行政の協力も必要です」と話されます。